

## 『源氏物語』に於ける六条御息所の役割

——六条院物語への改変をめぐって——

八 嶽 正 治

亡魂のなさしめる業である事を証しようと思う。

六条院物語は当初から予定されていた物語ではない。こゝでは『源氏物語』を一際輝かしいものとする六条院栄華物語を、それが計画された時から、栄華を描くだけでなく、人間関係の解体をも描く事をも目的とした部分である事を証する事を目的とする。当初の二条院物語から六条院物語への改変には六条御息所が重要な役割を担つていたと考えられるが、この事は、この物語に於ける六条御息所の意味を問い合わせ直す事にもなる。六条院物語は前半に四季絵巻を描いた玉鬘十帖と、後半源氏四十賀・朱雀院五十賀を描く「若菜」上下の二つの部分を中心とする。玉鬘十帖を後の挿入とする見方もあるが、作者の思考乃至は草稿としては有り得たかも知れぬが、成稿したものとしては、玉鬘十帖から「梅枝」「藤裏葉」の順でよからうと思う。<sup>(2)</sup>

物語全体の罪と罰・因果応報という主題は、六条院物語の後半部で展開されるが、六条の地を選んだ事 자체が既にその事を予測していたと考えられる。ここではその構想が「薄雲」の巻でどのような形で成立するかを指摘し、藤壺と六条御息所という、年上の二人の貴婦人の救われぬ

『源氏物語』のファクターの多くの部分が藤壺と関係する。大部分光源氏の圈内に生起する要素として捕えられる為であるが、その中で源氏の意志の届かない女性の代表として六条御息所が造形されている。そしてこのどうしても相容れない男女関係の歪みが、この物語の後半部を形成して行くのである。従来から、この長篇物語の中で、六条御息所の占める役割について考察される事は多いが、私はこの物語を藤壺系と六条御息所系に大きく分けてるので、藤壺の古代的要素に対立する六条御息所の近代的要素を「薄雲」の巻を中心に辿つてみたいと思う。<sup>(3)</sup>

長篇系の女性達は、何らかの形で藤壺系と関連を持つ。紫上・明石上・朧月夜尚侍然りである。同時に又、藤壺と一心同体である所から、光源氏とも密接な関係を持つ。<sup>(4)</sup>ところが長編系の中でも源氏の意志の及ばない恋愛関係があつて、それが六条御息所であり、朝顔であった。六条

御息所の登場は「夕顔」の巻冒頭の「六条わたりの御忍び歩きの頃」であり、以下二人の心の屈折が語られるが、六条御息所のイメージを決定づけるのは、野宮の場であり、この最後の逢瀬は、典型的な別れのシチュエイションを作り出している。これは「賢木」の巻であるが、六条御息所の今一つの性格を描き出しているのは、車争いと生靈を描く「葵」の巻である。車争は、葵上の氣位の高さが導き出したものとしているが、死を前にした葵上はかつてない表情を源氏に見せる。

例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。

男子出産後、死の直前の葵上は又次のような表情をする。即ち、源氏が「いときよげにうち装束きて出でたまふを、常よりは目とどめて見出だして臥したま」<sup>(5)</sup>ふのである。この年葵上二十六歳、死の直前に見せる心の安らぎであるが、六条御息所の方は手綱を休めてはいない。

かの御息所は、かかる御ありさまを聞いたまひても、ただならず。かねてはいとあやふく聞こえしを、たひらかにもはた、とうも思しけり。

無事安産をと聞くと押さえ切れない嫉妬の情が湧き上るのである。まさに激越といつてよいような女同志の争いであるが、六条御息所は、この時から七年後、「澪標」の巻で我が娘後の秋好中宮の後見を哀願して逝く。時に御息所は三十六歳であった。

葵上は、六条御息所について心にしこりの残る女性であった。藤壺や六条御息所程ではないが、四歳程光源氏より年上である。六条御息所程ではないというのも、自分の方に非のあるのは勿論の事、相手の方にも非があるという主張が源氏にあつたからである。「若菜」下でその非を次のように記している。

また、わが過ちにのみもあらざりけりなど、心ひとつになむ思ひ出づる。うるはしく重りかにて、そのことの飽かぬかな、とおぼゆることもなかりき。ただ、いとあまり乱れたるところなく、すくすべしく、すこしさかしとやいふべかりけむと、

それでありながら、夕霧という子を成し、先に見たように、死の直前は美しい描写になつてゐる。葵上にそれ程負債の感がないのは、正妻という地位と、夕霧という男子を成したからであろうか。それにしても、六条御息所に対する源氏の意識は、葵上に比べて奇妙に重い。葵上は六条御息所の生靈に取り殺されたのであり、取り殺されるという事は源氏圈内の女性である事を示している。<sup>(5)</sup>先の「若菜」下の葵上評について六条御息所評は現われ、奥ゆかしさと優雅さでは第一の人と評されている。

いとあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、いみじく思ひしめたまへりしがいとほしく、げに、人柄を思ひしも、我罪ある心地してやみにし慰めに、

源氏の罪の自覚が、六条御息所の場合ひたすらに大きいのである。この罪意識と巫女的な性格を受けとめる源氏の御靈意識がかくも六条御息所

の靈を強大なものにしてゐるのである。<sup>(6)</sup> 夕顔・葵上を殺した生靈の世界は、「賢木」に至り、愛切極まりない野宮の別れの場を演出する。以後、六条御息所のイメージは悪靈と野宮の二つのイメージを背負い登場するのである。『源氏物語』は、「葵」に至ると、女同志の動的な衝突が始ま<sup>(7)</sup>る。それ迄も桐壺帝時代の弘徽殿女御と桐壺更衣、或は、夕顔と六条御息所らしき生靈といった対立めいたものはあるが、概して光源氏を中軸として女性は個々で接触を保つてゐるという状況である。荒々しい嫉妬が描かれるのは「葵」の巻以降で、「葵」に於ける六条御息所対葵上、「賢木」ではこのドラマ状況はさらに拡大し、六条御息所の伊勢下向、朝顔の斎院入り、藤壺中宮落飾、臘月夜尚侍を中心に挿んで弘徽殿大後の指弾と続き、「花宴」迄の華やかさとはうつて変った世界へ突入する。

愛によつて絡め取られる女性群が、そのまゝ源氏の政治圏になつてゐるのであるが、その源氏圏に対立するのが六条御息所と弘徽殿大后であり、弘徽殿大后の方はまさに政治そのものである。「葵」「賢木」にこの二人の女性の活躍が描かれるのも、源氏中心の、安定した青春時代が、根底から搖らぎ出している事を示してゐる。<sup>(8)</sup>

# 一

「総合」「松風」「薄雲」は作者の計画変更を告げる巻々で面白く読める。<sup>(9)</sup> 「霧標」末では「然なむ思ふ。語らひ聞えて過ぐい給はむに、いとよき程なるあはひならむ」と秋好中宮の事を紫上に語り、紫上は二条院

寝殿に居たのであるから、同じ場所への「御わたりの事いそぎ給ふ」という事になる。ところが「総合」では、「かの六条の旧宮をいとよく修理し繕ひたり」として、彼女をその故里に置いたまゝで、親めいた世話を一年半の間してゐた事が明らかになる。この事は秋好中宮を、紫上に付属させたくない事だけははつきりしてゐるが、未だどこに里下りさせるべきか作者自身未定であつたといえよう。場所を六条にきめていきの「総合」の巻で六条御息所を回想すると共に、その故地を極めてゆかしげに描いてゐる事も事実である。

よき女房などはもとより多かる宮なれば、里がちなりしも參りつどひて、いと「なく、けはひあらまほし。

そして「よしありし方はなほすぐれて」と御息所を回想しその素質に触れて行く。六条の故地は、いかにも文化サロンといった面影の、高踏的な場所だったのである。こうした心理の中で、秋好中宮の里下りの場所をどこにすべきかとする作者の逡巡の度合いを知るべきである。

「霧標」で予定された二条東院を落着させるためには二つの抵抗があった。明石上と秋好中宮である。頭初の二条東院の予定は「松風」冒頭で告げられる。西の対は花散里、東の対は明石上、北の対は五節等であろうが、何人入るとしても「隔て隔て」と区切られている。源氏の寝殿を中心に女たちが放射線状に連なるという配置をみせており、二条院の人間関係の原形が形造られてゐるとみられよう。しかし、物語は、明石

上と紫上の厳しい確執を必然とさせ、その上に明石上の源氏との身分的な懸隔に対する危惧もあつて、かたくなに明石上が上京を拒否するという事態に至る。東の対は明石上と明石姫君の同伴が予定されていたが、同伴どころか東の対を空にしたまゝ營まれる。大堰の山荘に移住するの

は「松風」時点だが、源氏はこの件に関し、次のように思う。

人にまじらはむことを、苦しげにのみものするは、かく思ふなりけり、と心得たまゝ。口惜しからぬ心の用意かな、と思しなりぬ。

この後、「薄雲」冒頭で、姫君を紫上の膝下に置く事になるが、この時の明石尼君の説得は、源氏が臣籍に降下したのは大納言出自の更衣腹によるのだから高い身分のものの養女にせよといふもので、この物語では極めて深い意味を持つ内容であつた。紫上の苦惱を解消するという形で結着を見るが、この巻では明石上を終始不安定なまゝにしている。「薄雲」最末の源氏大堰訪問で「心やすく立ち出でて、おほぞうの住まひはせじ」と思へるを、おほけなしとは思すものから、いとほしくて」とあらゆ。うか／＼と女人達に交つて普通の愛人並の生活をしまいとしている明石上を、源氏は思い上つていると感じる反面、「いとほし」としているのである。源氏側からしても、明石上側からしても、花散里と肩を並べて「心やすき殿」二条東院東の対に落ち着く事はあるまいと思われるるのである。地統ぎの半ば独立していの独特な屋敷・六条院で明石上は安定感を得る。そして「乙女」の巻に、「ここかしこにておぼつかなき山里人などをも、集へ住ません」とあるように、明石上問題もその解決策

の一つとして六条院が營まるのである。

一方、秋好中宮は、二度クローズアップされる。一度目は、源氏が母御息所の遺言の線に沿つて、養女とし、冷泉帝に入内させようと藤壺中宮と図る条である。この部分、あまり秋好中宮自身には触れず、専ら、政争の一翼を担う扱いを受ける。左大臣家から入内した弘徽殿女御に勝つ為に、物語総合は、藤壺の御前から、帝の御前の行事へと格上げされる。これも、源氏の意志によってなされるのである。帝の御前の総合は月次絵や年中行事絵巻等が主となる晴の儀であるが、結局は、公的な総合に私的な源氏の須磨・明石の絵日記が勝つ事になる。紫上との関係も、紫上が子供がわりと考えて中宮を世話をすることで落着する。

二度目は、「薄雲」の巻の源氏三十二歳の秋、二条院に退出した秋好中宮に、春秋の優劣を尋ねられて秋と答える条である。源氏は、狭き垣根の内なりとも、そのをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をもすませて、人に御覽せさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ、

と尋ねるのである。「狭き垣根の内なりとも」とある所から、既にこの時点で、四季を楽しむ館は考えられていたと言つてよいであろう。秋好と別れた後、西の対に行き、紫上に「女御の、秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君の、春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ」と語り、六条院の春秋一大支柱を定める。花散里がその名から、夏の御殿

に入るのは当然の所であり、焦点は、紫上と明石上の妻妾関係に移るのは必然の筋道である。紫上は今めかしく感覚的な女性であり、忍苦と理性を宗とする明石上と良い対照を成している。

御息所在世中、及び秋好中宮が住んだ一年半は、美しく繕わせた住居だった六条の邸も今は人住まぬ。この御息所邸を四倍にして、中心に秋の御殿を設立する。花散里は、夏の御殿に住まう事は予測されていたが、四季御殿創設の思いと共に、秋好中宮も紫上も、そして明石上も人間としての季節感が定まったといってよいだろう。それ迄は、二条院に秋好中宮と紫上・明石姫君が、二条東院に花散里が住み、そして、明石上も東院に予定されていた。源氏を中心に考えれば、秋好中宮と花散里は性的関係がなく、紫上と明石上が妻妾の関係にあって、二つの屋敷に、秋好中宮と紫上、花散里と明石上が住むのはあまりに無機質であると言えよう。紫上と秋好中宮の屋敷は夫婦生活と権威の意匠にすぎず、花散里と明石上は両者に何らの関係もなく、共に生活派である。この四者の間に人間の血と心が通うのは、まず紫上と明石上との間に何らかの交流が必要で、明石上の女子を紫上は養っているのであり、両者の心の連携を得て、ハーレムは初めて成立する。六条院の生活はバランスの上で成立するが、正殿は飽く迄東南に位置する春の御殿である。しかし、政治的な柱になつているのは西南の秋好中宮の里邸であつて、当帝の妃として最も高い権威を形造っている。明石上の冬の御殿は、半分近くが御倉町になつており、当時の身分意識の強さを物語つてゐる。<sup>(10)</sup> 花散里の

主婦的な実直さは明確な形で造形されているが、夕霧や玉鬘を世話するという事で、六条院運営の一翼を担う。「若菜」下に於いては、紫上が明石中宮の御子を世話しているのを羨み、夕霧と藤典侍の間に生まれた二郎や三の君迄も手許に引き取る性格である。

『源氏物語』の舞台が、一条院から六条院へと移動する事によつて物語の規模は倍加する。須磨から帰つて、二条院は「思ふやうならむ人」紫上を住まわせているので猶整備させた事であろう。「標瀬」の巻で、手をかけた女性の多さから二条東院の建設を思いつく。二条東院は、二条院の「いと近き所」で、「花散る里などやうの心苦しき人々」を住ませる「心やすき殿」だったのである。明石上と明石姫君も又、「このほど過して迎へんと思して、東の院急ぎ造らすべきよし、もよほし仰せたまふ」(瀬標)とあって、親子共、東院におさまるべきであった。二条東院は明石姫君の御所としての性格もあつたのだが、二条院の紫上の下に身を寄せる。「薄雲」時点では、二条院は、西の対に紫上と明石姫君が、東の対に源氏が、寝殿に秋好中宮がおり、「寝殿の御しつらひ、いとど輝くばかりしたまひて、今は、むげの親ざまにもてなして扱ひきこえたまふ」と、中宮の里らしく豪華に飾られていたのである。

こうした状況から、六条の地を探り当てる意識は次のように動いて行つたものであろう。「総合」に於ける御息所邸への執着、「松風」の明石上の大堰移住、「薄雲」冒頭の明石姫君の養女入り、……しかしこゝ迄は單なる予感に過ぎない。決定的なのは、「薄雲」での秋好中宮との会

話とその時の「秋の雨いと静かに降」る季節だったのである。「薄雲」の中で、盈虚思想と同じように、政界から引退したい旨が語られる。「公私の營みしげき身こそふさはしからね、いかで思ふことしてしがな」と、「ただ、御ためさうざうしくやと思ふこそ心苦しけれ」など語らひきこえたまぶ。

この発言等から六条院は最初から、葛藤の修羅場として設定されたのではなく、単に二条院と二条東院を合わせた栄華を描こうとした所にあつたとするのが大方の意見である。しかし、「少女」の巻に始まる六条院物語は、南面に明石姫君を養う紫上と、秋好中宮を並べ、当代と次代の中宮で威を保ち、明石上と紫上の心理戦を軸としている。物語はこゝで初めて「桐壺」の巻に始まる二条院栄華物語から逸脱する。紫上の藤壺系物語が、秋好中宮の六条御息所系物語と合体し、未だ曾てない罪と罰の物語が始まるのである。

六条院は六条御息所供養の為の建物である<sup>(11)</sup>。秋好中宮の里が、二条院から六条院へと移るのも、作者の、そして源氏の、秋好中宮を立てようとする意欲と、六条の故地に対する執着を現わすものなのである。二条院がどこか家庭的な暖かみを持っているのに反し、六条院は美的結晶でありながら、女を季節に譬え、メカニックで非人間的なのである。作者はこゝに極樂を画くと同時に、修羅場をも書きたい意欲に最初から駆られたのではないかと思われる。六条御息所の故地であり、どこかこの世ならぬ気配が漂っているのである。「薄雲」に続く「朝顔」で、長い間

くすぶり続けていた朝顔への慕情を、一気に燃え上がらせる。世間ではこの関係をむしろ好ましいものとして取り沙汰し、その噂は紫上の耳にも入った。身分は同様ながら、世間的名声では前斎院と較ぶべくもなく、紫上の煩悶は深い。明らかにこの一挿話は、女三宮降嫁の先蹟であり、この位置にこの挿話をもつて来る意識は、六条院物語を栄華物語で終らせない意識が、既にこの時点にあつたと見られるのである。

藤壺の靈は源氏との密事という「この一つ事にてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ」と思うのである。「朝顔」の末尾であるが、藤壺は成仏していないのである。藤壺崩御は三月であるが、その年の秋の予定されている事を示す。まず秋の庭を見ながら、深々と六条御息所を偲ぶこの描写には、源氏への、六条御息所の強い浸潤を感じさせる。

秋の雨いと静かに降りて、御前の前栽の色々乱れた露のしげさに、いにしへの事どもかきづけ思し出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御方に渡りたまへり。昔の御事ども、かの野宮に立ちわづらひし曙などを聞こえ出でたまぶ。いとものあはれと思したり。次いで六条御息所への心の悔いを記す。

あさましうのみ思ひつめてやみたまひにしが、長き世の愁はしきふあきれるくらいに物事を思いつめてそれっきりになってしまった事が、一生涯の悲しみの種と思われましたがとある。その悔恨は、先にあげた

「若菜」下の、「我罪ある心地してやみにし」と類似した内容になつて  
いる。この後源氏は、秋好中宮との会話の中で、

東の院にものする人の、そこはかとなく心苦しうおぼえわたりは  
べりしも、おだしう思ひなりにてはべり。心ばへの憎からぬなど、  
我も人も見たまへあきらめて、いとこそさはやかなれ。

と、何故か花散里に触れる。秋好中宮から紫上へと移った後、筆は最後  
に明石上の「山里の人」へと及ぶ。六条院に集められるべき四人に触れ  
られるという事はこの時点では六条院構想があつたとしか考えられない。  
その上、源氏が何か事業を目論んでいる様がそここに記されている。

○中ごろ、身のなきに沈みはべりしほど、かたがたに思ひたまへしこ  
とは、片はしづつかなひにたり。

○「……時々につけたる木草の花に寄せて、御心とまるばかりの遊  
びなどしてしがな」と、「公私の營みしげき身こそふさはしからね、  
いかで思ふことしてしがな」と、

予定していた事が少しずつ実現しており、そこで、季節くの花にかこ  
つけて紫上が興味を牽くような遊びをしてみたいと言つてゐるのであ  
る。藤壺の喪に服しながら、三年前の六条御息所の死がたぐり寄せら  
れ、今この時の季節や、秋好中宮への愛執が六条の地を想起する事とな  
る。六条御息所の系譜は二条院物語の中に入るべきでなく、即ち、秋好  
中宮は、二条院でなく、六条御息所の故地へ退出しなければならない。

それは、成仏出来ない一人の女性、藤壺系物語と六条御息所系物語の合

体を意味していた。壮大な規模の悲喜劇が頭に浮かび、それは「桐壺」  
以来の理想境二条院でない方がよい。そして、当面、源氏の心をよぎつ  
たものは、六条の旧宮にやすらつてゐる六条御息所の死靈であつた。

「薄雲」の巻から紫上は対と呼ばれるようになる。冒頭部に既に「対  
に聞きおきて常にゆかしがるを」とあり、終末近くには「対に渡りたま  
ひて」とある。秋好中宮を迎える為に、紫上は明らかに西の対に居を移  
しているのである。この時点、藤壺崩じ、紫上は傀儡的イメージから独  
立しはじめる。<sup>(12)</sup> 藤壺の死によつて、紫上と源氏に最も強い紐帶関係が形  
作られ、秋好中宮に比較し、紫上は対屋住まいでは済まされない。六条  
院の造営の必然性の第三に紫上側からの突き上げも存するのである。

「桐壺」末での「かかる所に、思ふやうならむ人を据ゑて住まばやとの  
み、嘆かしう思しわたる」という予定は改変されたとみてよからう。し  
かし、実質的に「薄雲」の巻で始まる六条院構想の実体は、それに先立  
つ二条東院構想の中にあるといつてよい。藤壺の死によつて六条御息所  
の死がたぐり寄せられ六条院構想が始まると思われるが、それは次の部  
分等に指摘出来る。春秋論をきり出す、「薄雲」での秋好中宮と二条院  
で語る源氏の描写は次のようになつてゐる。

こまやかなる鈍色の御直衣姿にて、世の中の騒がしきなどことつけ  
たまひて、やがて御精進なれば、

「世の中の騒がしき」とは天変地異等であるが、実は藤壺の冥福を祈る  
為の精進とする説がある。<sup>(13)</sup> こゝに於いて物語は最も深部に入つて行つた

と見てよからう。帰京した源氏がまず考えたのが一条院を含めた一条東院構想であった。「濡標」に於いて、一条院寝殿に紫上を置き、秋好中宮を脇に置いて、紫上を中心とした配置にすれば不幸はおとずれなかつたが、そうは出来ず、秋好中宮を中心にせざるを得なかつた。その結果は極めて不安定なものであり、その配置は家庭と呼べるべきものではなかつたのである。一条院と一条東院を含めた構想が源氏の中にあつた時、その打開策として当然六条院構想が考えられて然るべきで、それは現時点で考えられる女人の最高の組み合わせであった。そして、こうせざるを得なかつたのは秋好中宮・明石上・紫上三者の為であり、場所に六条が想い起されたのは六条御息所故なのである。作中人物自体が動き出しているのである。紫上にとって六条院は公的な匂いの強い場所であり、二条院こそ私邸であり、「わが御わたくしの殿と思す二条院」と形容されている。当初から不幸は予定されていたといつてよからう。

### 三

「初音」に始まる四季絵巻は、当時の美的生活を画くと共に、源氏の最も油ぎった時代を書き切つていて、主題的觀点からも教養小説的觀点からも無駄なものではない。又、この部分は次世代の批判的な目も導入されている。

中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よりも見どころ多く、色種を尽くして、よしある黒木赤木の籬を結ひませつ

つ、同じき花の枝ざし姿、朝夕露の光も世の常ならず、玉かとかかやきて、造りわたせる野辺の色を見るに、

「野分」冒頭の部分である。黒木は、「賢木」の源氏野宮訪問をイメージするものである。源氏は「遙けき野辺を分け入り」、夕闇せまる嵯峨野の秋の花々を踏み分けた時、野宮の象徴「黒木の鳥居ども」が威庄的な影を投げかけていた。この文章は、こゝが他ならぬ六条御息所の故地である事を想起させる。この「野分」を境にして光源氏を相対化した地点からの著述が始まるのである。夕霧が源氏に拒否されていた紫上を垣間見るのもこの時であり、その美しさに圧倒されるが、これは源氏共々見入る「御法」の死顔の場面に直結する。

「若菜」下に現われる六条御息所の死靈は哀切極まりなく、この出現は、先に引いた同じ巻の、紫上とした批評に端を発しているのである。

問題は、この出現を唐突なものとみるかどうかである。<sup>(14)</sup> 六条御息所の思い出は、決して源氏の心から消えてはおらず、「藤裏葉」で、秋好中宮と夕霧を対比し、六条御息所と葵上の地位が、子の代になって逆転したと感じるが、それと同じ感想が「若菜」上でも現われる。源氏四十歳の暮であり、年変つての明石女御の出産の御祈禱では、葵上出産の生靈の件が念頭を去らない。このように、六条御息所は常に意識される上に、その面影は、現前する秋好中宮の中に宿っているのである。<sup>(15)</sup> しかし、六条御息所の死靈は、源氏が秋好中宮の後見につとめても「子の上までも深くおぼえぬにやあらむ」と、源氏への愛執に焦点を絞る。「思ふどち

の御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いとうらめしく」と源氏を怨む。紫上は小康を得るが、「現はれそめては、『をりをり悲しげなることどもを言へど、さらにこの物の怪去りはてず』といった状態である。御息所の死靈は猶強く、罪過に恐れおののく女三宮にとりつき、出家に至らしめるのである。この源氏の權力を相対化して見せる視点は、「野分」に於ける夕霧の目と同じ視点であり、如何に御息所の系譜が源氏に対立するものであるかゞ明らかになるのである。

源氏は六条御息所の愛を知りながらも、紫上との睦言に、「人見えにくく、苦しかりしさまになんありし。恨むべきふしそ、げにことわりとおぼゆるふしきを、やがて長く思ひつめて深く怨ぜられこそ、いと苦しかりしか。心ゆるびなく恥づかしくて」と、六条御息所の性格の核心をつく批評をする。この後紫上発病し、二条院に移したのが三月、四月の葵祭の御禊の前夜、柏木と女三宮の密通、葵祭の過ぎた頃、紫上危篤に陥り、六条御息所の死靈が出現する。中宮の事はそれなりに感謝しているが、つい先頃、自分の事を、気がおけてつらい、執念深いと睦言で評した事がこうした結果になったのだと告げる。「なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむとまるものなりける」とあるが、この場合の「心の執」は、自分の娘の事よりも、過去の屈辱よりも、女樂の後の、紫上に語った批評の方が悔しいとする、生々しく女らしい死靈の言葉である。過去に執するよりは今も恨みを重ねている事を告げ、これに続く

「柏木」の巻での女三宮出家の際の死靈の記事は次のようである。

後夜の御加持に、御物の怪出で来て、「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いと妬かりしかば、このわたりにさりげなくてなん日ごろさぶらひつる。今は帰りなん」とてうち笑ふ。

紫上については、うまく行つたと思っているのが「いと妬かりしかば」、このあたりに取りついていたという。死に迄至らしめないが、源氏の愛人の誰かは引き離そうとする、極めて女らしい死靈である。

「物の怪の教にても、それに負けぬとて、あしかるべきことならばこそ憚からめ、弱りたる人の、限りとてものしたまはんことを聞き過ぐさむは、後の悔心苦しうや」

朱雀院の言葉であるが、物の怪が言わせている出家の希望だからとて悪い事はなかろうと、万が一の死を懸念して言つてるのである。この言葉と、御息所の死靈の言とは対応しているのである。藤井貞和氏は、「尼にもなりなばやの御心つきぬ」に「憑」を重ね合わせていて。女三

宮は、次のように、「常の御けはひよりは大人びて聞こえたまふ」。なほ、え生きたるまじき心地なむしばれるを、かかる人は罪も重かなり。尼になりて、もしそれにや生きとまると試み、また亡くなるとも、罪を失ふこともやとなん思ひはべる。

長い間の苦惱の果に、女三宮は正常でなくなつていると共に、死を前提にして出家を望む心だけは頑としているのである。源氏が出家願望は物

の怪のなす業らしいので取り合わないと、出家は悪い事ではない。だからと朱雀院は我が子の嘆願をせつない程に受けとめているのである。物の怪の発言は、後になってからの証明のような形になっているが、「このわたりにさりげなくてなん日じろさぶらひつる」は、源氏の発言「日ごろもかくなんのたまへど、邪氣なんどの人の心たぶろかして」と照応する情況である。朱雀院の言葉は、源氏に唯々諾々としていた人が最後にみせた抗議であり、物の怪の力と共に源氏圏がます／＼縮小されて行く様を描いていると言つてよからう。

「鈴虫」は、源氏五十歳の盛夏から中秋にかけての時期で、女三宮の御堂供養に始まり、秋好中宮の母御息所追善供養に終る。<sup>(16)</sup>二つの供養は、宿命的な情熱の帰結としての罪業と、死者の妄執の為である。「若菜」下で紫上を危篤に引き込み、「柏木」で女三宮受戒をあざ笑ったのは六条御息所の靈である。紫上と女三宮は、藤壺を楔として同一の系譜の中にある。女三宮の罪業供養から、精神的紐帶の崩壊する落莫たる秋の六条院への感慨、そして場所が冷泉院へ移り、地獄の業火の中にある御息所への供養となる。作者が六条御息所の系譜を、この物語の第二主題と考えていたのであり、二つの供養は対になつてゐる。

源氏・女三宮・秋好中宮の、相容れない三つの心をこの巻では描いているが、六条御息所の死靈については次のように触れられている。御息所の、御身の苦しうなりたまふらむありさま、いかなる煙の中にまどひたまふらん、亡き影にても、人にうとまれたてまつりたま

ふ御名のりなどの出で来けること、

地獄の責め苦にあつてゐるであろう事、火煙の中をさまよつていられるのであるう事、「亡きかげにても」即ち、死後の姿になつて迄も、人に厭がられる名のり等の事態がおこつた事等を、秋好中宮は心中に思い、供養に怠りがない。女三宮・紫上に祟りながら未だ成仏していないのである。六条院を舞台にする事によつて、源氏の内なる藤壺の靈と、源氏の外なる六条御息所の靈を一体化する事、即ち、藤壺系の罪の問題を、六条御息所系で顕在化する事に成功したのである。

六条御息所の靈は「鈴虫」で手篤く弔われるが、この六条御息所の系譜はどこへ流れ込むのであるか。作者は何故か、秋好中宮と冷泉帝に薰を愛させる。<sup>(17)</sup>共に弟に当たる所だから当然ではあるが、思えば、この物語の主題は、罪の物語の藤壺系と、靈界の物語の六条御息所系を合体させ、薰の中に注ぎ込んだのである。正篇に対して、宇治十帖は宇治での異界の物語のようであるのも、源氏的觀点に立てば、不如意の物語であるからに外ならない。今迄の言い方をすれば源氏圏外の、源氏の意志に反した世界の物語なのである。この物語の教養小説としての側面は源氏一代記として「幻」の巻で終るが、宇治十帖の中の前半、中君迄の物語は、源氏正篇の主題の中にあるものである。<sup>(18)</sup>しかし、浮舟物語を含めた宇治十帖全体は、独立した一編のヌーヴェルとして充分に新たな主題を展開し得てゐるのである。浮舟物語を付加する事によつて宇治十帖は独立し得たと言つてよいであろう。

注

(1) 「若菜」上下の分厚さと共に、一年に多くの巻数を入れ込む玉鬘十帖は特異であるが、四季絵巻を描く必要性の為と解する。猶、武田宗俊氏の提出する諸問題は、執筆順序の問題とせず、「源氏物語」の、特殊な構造論と解する。

風巻景次郎氏の言われる、「少女」と「梅枝」との間に、もと一年間のこと書いた「桜人」という巻があつたが、それが除かれて「玉鬘」十帖が四年間の出来事として挿入されたという説等は注目される。描写段階の問題として、嫉妬する紫上の側面が、「松風」の対明石上や対「朝顔」から、「若菜」上の対女三宮・臘月夜へと飛んでしまい、「少女」から「藤裏葉」迄紫上の面影が稀薄な事、「梅枝」「藤裏葉」で描かれる夕霧が、玉鬘十帖で（特に「野分」以降）描かれる夕霧像より幼なく見える点等が、物語の流れとして異和感を起させる。

しかし、玉鬘十帖の挿入は結果的に、この物語を多様に、そして内容を深化させた。玉鬘物語挿入の意図は明らかで、「好色者どもの心つくさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」（玉鬘）という光源氏の意図によるものである。玉鬘物語は、源氏の好みの世界の一エピソードであると共に、長編的構想の一環として、明石姫君入内後をも展望する源氏榮華の物語なのである。この物語が挿入される事により、今迄、事件から事件へと縦追いのストーリー性を持つようになるのであり、特に「野分」以後は、「若菜」上以降の第二部を導き出す、方法論上前駆的性格を持っている。「滑標」に始まる政争も、プロットの上で内大臣（頭中将）に、この玉鬘物語の経過を経て、「藤裏葉」で源氏との決定的な力の差を自覚させるに至るのである。又、「初音」から「行幸」に至る四季総巻は、中年の光源氏を中心に秩序立った愛情空間を描き、特に玉鬘の心を領有するに至る「野分」迄は、男としての魅力を書き切っている。

「標滑」「総合」は、秋好中宮入内の巻々であり、この後、「松風」「薄雲」「朝顔」「少女」「X（玉鬘十帖前に存在していた巻で風巻氏の「桜人」に照合カ）」巻を経て、明石姫君入内の「梅枝」「藤裏葉」の二巻に続いたならば、物語はあまりに直線的な権勢の物語になってしまおう。

内内にも、やむことなきこれかれ年ごろを経てものしたまへば、えその筋の人数にものしたまはで、捨てがらにかく譲りつけ、おほぞうの官仕の筋に、領ぜんと思しおきつる。

この発言によつて、源氏は自分の心の内部を正確に射当てられ、行動を阻止せられる。このあたり、夕霧の最も大人びた青年ぶりが画かれるので、「梅枝」「藤裏葉」両巻の夕霧より後年の感、即ち、両巻よりも年令はともかくも、成熟した感を抱くかもしれないが、両巻の夕霧の描写はそれを上廻る大人びたものなのである。「藤裏葉」冒頭、内大臣は、藤の宴に事よせて夕霧を招待する。この場で夕霧の結婚が成立する訳であるが、内大臣も夕霧も酔つたふりして芝居をしており、相互にそれを承知している。諸般がわかつており、こうした演技によつてのみ、七年来のしこりを捨てることが出来たのであり、大人の世界へ仲間入りしたといつてよい。

玉鬘十帖を中心とした六条院榮華物語を、榮華賛嘆の筆致のみで描いた散文性の薄い部分という批判もあるが、私はこの部分、この物語の中で過不足ない必然性を持っていると考える。「若菜」の巻の散文機能については称賛の声が高いのであるが、「乙女」から「藤裏葉」に至る部分も無意味な事は全くないのであって、たゞ散文機能が多様化しているだけなのである。この巻々は、源氏の中年期の政治性を描くと共に、夕霧等の精神的な成長を描いており、教養小説としての重要な一時期を描出している。一方、家の物語としても、最も幅広く扱っている時点で、光源氏の家、左大臣家、右大臣家、紫上の父の式部卿

(2) 玉鬘十帖に於ける夕霧はかなり成熟した面影を見せる。野分の場に於いて、夕霧は紫上を初めて見、その美しさに驚嘆し、自分を紫上から隔てる源氏の真意に思い至る。その後、六条院の女方を見舞う源氏の供に従うが、玉鬘の所で源氏が戯れる親しさを垣間見て不審に思う。次いで明石の姫君を垣間見、今日見た紫上を桜、玉鬘を山吹、この姫君を藤に譬えられようかと思う。諸家が指摘するように夕霧の視点が導入され、源氏中心の世界が相対化されているのである。その延長上に、世評や内大臣の思惑にかこつけて自分の玉鬘に関する疑惑を父になげつける。

宮家、髭黒の右大臣家等の抗争を描いてヴィヴィッドな側面を持つてゐるのである。この中、左大臣家の頭中将と光源氏は子供の時から友であり、競争相手でもあつた。雲居雁の件を境にして二人の仲はしつくりいかなくなるが、玉鬘の扱いに関して接触せざるを得なくなる。「行幸」の中での、大宮や源氏の発言の中に内大臣のかたくなさは語られるが、会えば仲よくなる間柄なのである。二人の確執の最終的結着は、「藤裏葉」最末、冷泉帝・朱雀院の六条院行幸で語られる。「なほこの際はこよなかりけるほど」を自覚するのである。

(3) 藤井貞和氏「光源氏物語主題論」(『源氏物語の始原と現在』砂子屋書房 平成二年九月一所収)・「六条御息所の物の怪」(講座源氏物語の世界・第七集)有斐閣—昭和五七年一所収。多屋頼俊氏「もののけの力—六条の御息所を中心に」(『源氏物語の思想』法藏館—昭和二七年四月一所収)。これ等は長編系の中で六条御息所を捕えたものであるが特に後者は「もの」の独立性を主張し、「不幸ばかりを齎らす生靈・死靈を現出する媒介体となった御息所を、何の必要があつて光源氏に纏わせたのであらうか。(中略)理想の人光源氏を描こうとするに当たつて、自肅自戒の道を与えておかなければならぬ。御息所を光源氏に配したのはこの故であると考えられる」とされている。

(4) この物語の中枢に藤壺を置く事によって緊密な人間関係が形成されるというのが私の一貫した考え方である(『源氏物語』に於ける藤壺の意味)橋本不美男氏編『王朝文学資料と論考』—平成四年八月一所収)。

(5) 「葵」の巻に、頭中将の感想として、葵上に対する源氏の愛情の「浅からぬほどしく見ゆれば」とあり、「まことにやむことなく重き方はことに思ひきこえたまひけるなめり」という事がわかつたと記している。阿部秋生氏は葵上の死後源氏が本氣で出家することを考え始めたとしてその無常感に意味を見出している(『光源氏の発心』『源氏物語研究と資料』一所収)。本文を見る限り源氏の愛の処置は既に済んでいるという書きぶりであり、後の「藤裏葉」での秋好中宮と夕霧との比較の記述からもその事は言える。葵上は、政略結婚の不幸と、紫上登場の為の抹消といふ役割を負わせられて造形された人物なのである。

(6) 御靈信仰については、西郷信綱氏「源氏物語の『もののけ』について」

(『詩の発生』所収)で触れる。猶源氏の恐れは、桐壺帝の訓戒と密接に関係する。『源氏物語』の中では桐壺帝のみ世代を異にし、藤壺といえども源氏と同世代に属す。際立つた年長者だけに賢帝で人格者、神的存在として造形されている。この物語では女人を得る事が自己の権力を拡大して行く有効な武器になつており、それだけに女人の扱いが重要な位置を占めている。こゝでは源氏圈という言葉を使うが、源氏に絡め取られる対象たり得るか得ぬかで、女人を大きく類別し得る。六条御息所は明らかに源氏圏の女人でなく、どうしても男と融合し得ない性格の女性であった。以下に引用するのは「葵」冒頭の、桐壺帝の源氏への訓戒で、物語全体の中でも重要な位置を担つてゐる。「葵」から女人間の衝突が画かれるが、政治的に安定感を失つて行く源氏と、この桐壺帝の訓戒とは対応関係にあるのである。これより前に、紫上を引き取つた時の噂は葵上と対比して描かれていて、左大臣の女房達が「……心なげにいはけて聞こゆる」と取り沙汰しているのが帝の耳に入つたである。帝は、左大臣の恩顧を語り、「……などかなさげなくもてなすならむ」と訓戒しつゝ、「かく人にも恨みらるらむ」即ち、どんな女のもとに忍び通つて、このように左大臣家の人々の恨みう買うのだろうかと呴くのである。それと対応するかのように、葵上の死後、兄の頭中将の言葉の中に「院などゐたちてのたまはせ」とあり、葵上の扱いについても始終帝は注意を与えていたのである。

「故宮のいとやむことなく思し、時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるがいとほしきこと。斎宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからぬ。心のすさびにまかせて、かくすきわざるは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御氣色あしければ、わが御心地にもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の怨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほかなさを聞こしめしつけたらむ時と、恐ろしければ、かしこまりてまかでたまひぬ。

六条御息所は桐壺帝同腹の弟の妃であり、大切にされた人なのに、それを軽々

しく並の人のような扱いをするのは氣の毒極まりない。そしてこの訓戒を聞く源氏は、藤壺の件で心突かれる。「けしからぬ心のおほけなさ」とはこの事を意味し、それが又、この物語が藤壺系と六条御息所系に大きく分かれ、この二者によつて支えられている所以なのである。注(3)に記した多屋頬俊氏の発言「自肅自戒の道」と、この桐壺帝の訓戒とは対応関係にあると言えよう。

(7) 「この巻で、従来、とかくばらばらに取りあつかはれてゐた女主人公(中略)は、各々のはつきりとした個性をもつて登場し、それそれの立場で他と対決を求める事になった。ここに長篇小説としての新しい展開がある」(池田亀鑑氏『新講源氏物語上』)。

(8) 「葵」「賢木」を承けて「瀧標」から「朝顔」迄は、政治的霸者としての源氏を画くと共に、家の抗争を描いて、源氏壯年の活動期と重ね合わせる。明石から帰り、代が替る。人々の動静の変化に触れ、「大后」から「兵部卿の親王」へと筆が移る。政敵として両者を一類に扱つてゐるのである。大后には「心寄せ」する事によつて、往年の悪意を意識させ、兵部卿宮には昔のように親しくはしない。朱雀院への態度も徹底しており、藤壺は朱雀院の秋好中宮への愛着を知りながら、「かの御遺言かをこちて知らず顔に参らせたてまつりたまへかし」とする。兵部卿宮の中の君も入内を望んでゐるが、それを拒むような形に藤壺はもつて行く。

「宮の中の君も同じほどにおはすれば、うたて雛遊びの心地すべきを、大人しき御後見は、いとうれしかべいこと」と思ひのたまひて、さる御氣色聞こえたまひつつ、

冷泉帝内裏には、既に弘徽殿女御がいるが、帝十一歳で、女御十二歳、雛遊びの相手は女御一人で充分であるといふのである。秋好中宮は當時二十歳、後宮に必要なのは「大人しき御後見」であり、その事を、帝に幾度もほのめかして申し上げているといふのである。源氏と情念で結びついていた藤壺は、今度は政治で結びつき、それも極めて有能である。

「総合」に於いて秋好中宮と弘徽殿女御とが相争い、秋好中宮の勝利に帰す事で源氏の制覇は確立する訳であるが、玉鬘物語を経た後の「藤裏葉」で、頭

中将は源氏と比較して、自分が従である事を感じ入るのである。

大臣、そのなりは同じ舞に立ち並びきこえたまひしを、我も人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりけるほど思し知らる。

「そのをり」とは「紅葉賀」の青海波の折、源氏は中将で、自分は頭中将であった。「この際」とは、源氏の身分、家柄、才能、器量が、この上もなく尊いものであったと思ひ知らされたという事なのである。

(9) 「桐壺」「若紫」「瀧標」と、予言という形で展開された物語の骨幹部分は、須磨・明石から帰京した当時の光源氏に、すでに出来上つてゐた。「瀧標」の卷あたりから見ていられる(六条院の形成—二条院栄華の物語と六条院の構想)『源氏物語論考』風間書房—昭和五六年六月一所収)。

即ち六条院の造営を企図した時、すでにあくことなく追求してきた一条院『源氏物語』の読み取り方はかなり異つて来るが、伊井春樹氏はそれを「少女」の卷あたりから見ていられる(六条院の形成—二条院栄華の物語と六条院の構想)『源氏物語論考』風間書房—昭和五六年六月一所収)。

理由は恐らくその通りで、六条院の構想は、高橋和夫氏をはじめとして諸氏の説かれるように、創作意図の変化によるものなのである。たゞ、その計画時点においては、やがて「少女」の卷ではなく、通説通り「薄雲」時点であろう。

二条東院は「瀧標」の巻に初出し、

二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど、思ひあててつくろはせたまふ。

同じ巻に、

「……あやしき世界にて生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな。このほど過して迎へてん」と思ひて、東の院急ぎ造らすべきよし、もよほし仰せたまふ。

二条東院の落着した様を記すのは「松風」の巻冒頭である。

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿な

どかけて、政所家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありて、こまかなり。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さる方なる御しつらひどもしおかせたまへり。

しかしこの「松風」時点、秋好中宮はまだ六条の旧地におり、明石親子もまだ、東の対に入つてない。

二条東院は「蓬生」で末摘花が、「二年ばかりこの旧宮にながめ給ひて、東の院といふ所になむ、後は、わたし奉り給ひける」とあり、空蝉は「初音」の巻で二条東院入りする。この処置は後補と考えてよからう（大朝雄二氏「蓬生巻試論—源氏物語・並びの巻に関する覚え書」『日本文学』—昭和四三年六月）。

(10) 六条院は光源氏の所有から夕霧の所有になるのが通説だが、「六条院の真の主は、最初から、海竜王の一族たる明石御方なのである」「山田利博氏「源氏物語正編の骨格—明石一族を視座として—」〔国文学研究〕第百七号」とする見解や、冬御殿裏の倉町を明石上の財産とする見解がある（秋山虔氏「寂聴対談」『女人源氏物語第三巻』付載）

(11) 「野分」の巻は、六条院秋の町の叙景にはじまる。こゝは、中宮の母六条御息所が住んでいたころの旧状を尊重して作られた庭である。

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもをそへて、泉の水遠くすまし、遺水の音まさるべき巖たて加へ、滝落して、秋の野を遙かに作りたる、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり。嵯峨の大堰のわたりの野山、むとくにけおされたる秋なり。

「少女」の巻の六条院秋の御殿の紹介である。「もとの山に」とあって、旧態を残したのである、「もとありける池山をも、便なき所をば崩しかへて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり」という六条院造庭の基本的なあり方とは異つているのである。「秋の野を遙かに作りたる」様がすばらしく、秋の名所の嵯峨の大堰等見る影

もないと言つてゐるのである。秋好中宮自身、前斎宮なのだから、野の宮の秋は知つてゐるが、この庭の好みはどうも源氏のものらしい。「もとの山」とあるから、六条御息所の好みを残し、猶且、それに、野の宮の別れの時が忘れがたく、源氏が野の宮の風情を加えたのではないかと思われる。

(12) 紫上は一度この物語の中で迫り上る。一度目は藤壺の死である。精神的に夫婦であるのは藤壺であり、その死を待たない限り、実質上の夫婦ではあり得ない。

(13) 「ことつけたまひて、やがて御精進なれば」の部分、日本古典文学大系で山岸徳平氏は次のように注していられる。「かこつけなされて、実際には、そのまま藤壺入道宮の為に御精進なさるのであるから」（第二巻三三九頁）。かこつける意の「ことづけ」（山岸氏の校注では濁音とする）といへ、「やがて」の用法といへ、このような文意と捕えて間違いはあるまい。

(14) 六条御息所を短篇系とみなす見解もあるが『源氏物語研究』（有精堂）中、池田亀鑑氏執筆、それは、「葵」「賢木」の描写があまりに勝れている為である。又この死靈出現の箇所を、死靈が出なくとも充分説得力があり、なくもがなの出現とする見方もある『源氏物語講座2』（勉誠社）中、樋原茂子氏「六条御息所」。

(15) 秋好中宮は、清楚で内氣、そして聰明と、六条御息所から毒を抜いた造形になつてゐる。誘惑する源氏の残り香さえいとう感性（薄雲）や、源氏に「いふかひあり、をかしらむ方のなぐさめには、この宮ばかりこそ」（御法）と思わせる趣味の良さ等、明らかに六条御息所を繼いでいる。

(16) 「鈴虫の巻は、いわれてゐるような余情の巻でなく、きわめて主題的な一巻であつた」（注3所引藤井貞和氏論）。

(17) 『源氏物語』はある程度の構想が定まつた時点（「紅葉賀」「花宴」の頃か）

では今上の東宮冊立迄は予定されていたと考えられる。「明石」の巻にある「ほのかに見たてまつるより、……月日の光を手に得たてまつりたる心地して」とあるのがその証といえる。男子出生は、「若菜」上の巻末近く源氏四十一歳の時であり、六条院で誕生、明石入道は夢判断で即位疑いなしと判する。それから五年後今上の即位の時に春宮になるのが「若菜」下冒頭部である。春宮の誕生は翌年十二月以前恐らく夏頃で「若菜」下の方に記される。二宮誕生の記述は「春宮の女御は、御子たちあまた数そひたまひて、いとど御おぼえ並びなし」とあるのみであるが、匂宮の場合は次のごとくである。

このたびの御子は、また男になむおはしましける。すぎすぎいとをかしげにておはするを、明け暮れてもあそびたてまつりたまふになむ、過ぐる齡のしるし、うれしく思されける。

「すぎすぎいとをかしげにておはするを」とあり、特に匂宮という訳ではないが、明石中宮腹の皇子達の愛らしさを造形している。しかしこの著述の中から後の匂宮の活躍を説くのは無理である。たゞ、この匂宮誕生の時点が、朱雀院五十の御賀試楽の直前である事は意図されたプロットを感じさせる。柏木はこゝでやむを得ず、重い心をひきすつて登場するのである。匂宮誕生を明とすれば、柏木との交渉は暗であり、薰誕生へと筆はすゝんで行く。当初の、東宮冊立迄記すという明石上系の物語の目的は主題論と関係しながら、つまり、薰という対照性を予定しながら、匂宮を画く所迄を予定していたのではなかつたかと考えざるを得ないのである。

薰は主題の要請に随つて設定された人物で、逡巡する近代的性格で宇治十帖の軸になる。誕生は「柏木」の巻で、出生に関して源氏は次のように思う。

「……さてもあやしや。わが世とともに恐ろしと思ひし事の報なめり。この世にて、かく思ひかけぬ事にむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなんや」と思す。

「わが世とともに恐ろしと思ひし事の報なめり」という言ひ方は、「後の世の罪もすこし軽みなんや」と対になっていて、「若紫」の次の言を髣髴とする。わが罪のほど恐ろしう、あちきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれ

を思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき、思しつづけて、傍点の部分を見るように、「生けるかぎり」と「後の世」とは対になつており、この主題が、薰出生という報いを受ける事によつて、源氏は「後世の罪も少し軽みなんや」と思うのである。

抱きとりたまへば、……女御の御宮たち、はた、父帝の御方ざまに、王氣づきて氣高うこそおはしませ、ことすぐれてめでたうしもおはせず。この君、いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなどをいとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとようおぼえたりかし。ただ今ながら、まなこののどかに、恥づかしきさまもやう離れて、かをりをかしき顔ざまなり。

源氏の抱く薰を描写した條であるが、「かをる」という語が二度出て来ており、目もと、顔全体が匂い立つようだたとしているのである。「若紫」に始まる主題性といへ、匂宮を上廻る薰の描写といへ、第三部が、薰を中心にして記述されることは予定されていたと言つてよい。「紅葉賀」で冷泉帝を抱く桐壺帝の描写があつたからこゝで新たに薰抱く源氏の姿を駄目押したのではなく、冷泉帝を抱く桐壺帝を描き、そして、父が我が子を抱く情景を見る源氏の心境を写した時に、因果応報として、定かな形でなくともこの「柏木」での描写は予測されていたと考えられる。犯しによる疑似の親子関係は、桐壺帝—冷泉帝、源氏—薰の関係の中に成り立つのであり、その中間たる冷泉帝と源氏の間には成立しない。薰の代迄必要としているのである。

薰の性格は、秋山虔氏「薰大将の人間像」(『源氏物語の世界』東京大学出版会—昭和三九年一二月—所収)や清水好子氏「薰創造」(『文学』昭和三二年二月号)で分析し尽されているが、その優柔不斷さは、宇治十帖前半部に於いても、「総角」冒頭では大君の「御髪のこぼれかゝりたるをかきやりつゝ見給へば」という所迄近づきながら事なきを得る所に示される。以後、中君、重態の大君、そして二条院での中君と、薰は三度同衾しながら女性に触れる事をしない。それぞれ理由のある事ではあるが、この辺にも薰の、極めて特殊な性格が描かれている。かといって不能なのではなく、女主人公に対する限りない優し

さなのであって、女房連との交渉は多く語られている。その点、大君・中君に短篇系の女房連同様の中品とする認定もあるが、浮舟にはそのような事は言えるものゝ、物語の扱いの上では上の品なのである。薰の負の性格は、作品の意図する所であって、恋愛の対象は女一宮であるものゝ、「横笛」に至つては、この君のまみのいとけしきあるかな。小さきほどの児をあまた見ねばにやあらむ、かばかりのほどはただいはけなきものとのみ見しを、今よりいとけはひことなるこそわづらはしけれ。

と記しており、「いとけしきある」「いとけはひことなる」性格を付与しているのである。『源氏物語』は当初漠然と、光源氏という色好みなる男の一代記を記そうとしたかに見えるが、「桐壺」の巻を冒頭に据え、主題を明確に見定めた時、二代に涉つて記されるべき事が、自覚された事と思われる。これは藤壺を中心とする物語の根元に纏わる性格であつて、桐壺と冷泉、源氏と藤壺、柏木と女三宮、源氏と薰という、密通と疑似親子の織りなす系譜である。源氏に他人の子を抱かせる構想はあつたものゝ、創作の手続きとしては、主題としての罪と罰の表出の為プロットの創出が最も優先し、人間造形はその後に、即ち、第二部に於ける柏木の起用と女三宮の創出、第三部に於ける大君の創出等がなされた。これらの人間像は予定されたプロットと人間造形の必然性が過不足なく結び合い、卓抜な物語造形となっている。しかし、源氏の生涯が輝かしい現世の物語であったとすれば、宇治の物語は霊界の物語であり、薰に負の性格を持たせようとする事は当初から考えられていた構想であつたろう。たゞ、それに配する大君の性格等は、正篇の結婚拒否の女性群や、紫上の微細な造形を経た後にはじめてなし得た人物造形であると思われる。

藤壺崩御後示される冷泉帝出生の秘密は、「橘姫」最末の薰出生の秘密露見と重なり合うが、この記述迄は当初意図していまい。冷泉帝の場合は、父が臣下である事の不敬が自覚されるが、薰の場合は痛ましいものである。残された柏木の手紙は、断末魔の愛欲の如き乱れた筆跡として残されている。「さまざま悲しきことを陸奥國紙五六枚に、つぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて」「紙魚といふ虫の住み処になりて、古めきたる微くさながら、跡は消え

ず、ただ今書きたらんにも違はぬ言葉どもの、こまごまとさだかなるを見たまふ」とある。痛ましい愛欲の美事な造形で、薰はこの感無量なるものを、柏木の後に残った女三宮の「いと何心もなく、若やかなさましましたま」ふ姿を前に、内に飲み込んでしまうのである。女三宮の創造が第二期なら、その後に造形されるべきこの部分のプロットは、主題が極めて明瞭な形で追求される第3部に至つての所産と考えてよからう。

事実上薰は、大君・中君・浮舟と不如意の恋に終るが、この否定的結末は、のどやかで、誠々しい、「忠実人」<sup>（忠実人）</sup>たるの性格設定と共に当初から予定されていたものであろう。光源氏の罪を、光源氏自身では贖い得ない所に設定した所で運命劇としての『源氏物語』の面白さはある。配する大君は、はかばかしい後見がなく、自分も又すぐ老いてしまう事を理由に結婚を拒否する。そこには飽く迄精神のみの愛で結ばれようとする積極性があるのではなく、結婚を拒否しながら薰には引かれている忸怩たる女心が存するのである。これに対応する薰は、孤独癖と官界立身への無関心、求道、それと共に、出生の秘密をひろめぬ為に自分は大君と結婚し、中君を匂宮と見合わせようとする功利的な意志をも持つ俗性にたけた複雑な人間として造形されている。魂の飛翔する恋とは無縁な薰の負の性格は争うべくもないものである。

(18) 六条得息所を長編系の中で捉える代表的な論文に河北騰氏「六条御息所について—源氏物語構成の展開—」（『国語と国文学』—昭和三年六月—）がある。分析的に論理づけていないので詳細は不明だが、次のような結論は、感として鋭いものがあろう。

斯くの如く迹づけて見るならば、恰も申し訳のように「まことや」の語を常に冠せられながらも、此の六条御息所こそ、終始一貫して作者の脳裏に浮び続けていた重大な人物であつたのだし、又、それ故にこそ、最も主要な女主人公達を、相次いで交替退場せしめる事ともなつて、遂に幽暗深邃なあの宇治十帖の世界へと、物語の構想を見事に引致せしめ得た、第一に注目に値する人物であったと云えるであろう。

(本文引用は、阿部・秋山・今井氏校注の日本古典文学全集本による)